

成人に達した川崎病冠状動脈後遺症例の検討 について

(分担研究：川崎病サーベイランスに関する研究)

浅井利夫, 伊藤けい子, 松永 保.

要約：川崎病は川崎病博士が発見して以来、25年余の年月が達ち、小児期に川崎病に罹患して成人に達した症例も増加している。今回、当院で経過観察している冠状動脈造影にて川崎病冠状動脈後遺症の存在が確認された症例の内、年齢が20歳を越えて成人になった症例の冠状動脈後遺症、診察状況、日常生活状況を調査した。18例の成人例の内8例が、成人に達する前に経過観察と治療が途絶えてしまっていた。経過観察と治療が継続し得た症例は全員元気に過ごしていた。今後、川崎病冠状動脈後遺症例の内科へのバトンタッチなど検討する必要性が確認し得た。

見出し語：川崎病冠状動脈後遺症, 成人, 長期予後,

はじめに

川崎病で解決しなくてはならない問題としては1例の冠状動脈後遺症を残さない急性期の治療方法の確立、冠状動脈後遺症を残した罹患児の長期予後、最後に原因の3つがある。川崎病も川崎病博士が報告して以来25年余の年月が達ち、冠状動脈後遺症を残して成人に達した症例が年々増加し、川崎病の長期予後も徐々に解明されつつある。これまでも川崎病の長期予後に関する研究報告は散見されるが、多くは発病からの長期予後である。小児期から定期的に経過観察や治療したり、冠状動脈造影検査をして、成人に達した症例での検討はない。そこで、今回は当院で経過観察している症例で、成人に達した症例の冠状動脈後遺症の程度や診察状況を調査したので報告する。

対象および方法

対象は当院にて冠状動脈造影検査を実施し冠状動脈後遺症残存の確認が出来た症例の内、年齢が20歳を越えて成人に達した川崎病罹患児18例である。

対象18例の内訳は20歳過ぎても経過観察と治療が出来きている症例が10例、20歳までに経過観察と治療が途絶えた症例が8例(男性：5例、女性：3例)である。20

歳過ぎても経過観察と治療が出来ている10症例の内訳は外科手術をした症例が5例(男性：4例、女性：1例)、外科手術を必要としなかった症例が5例(男性：3例、女性：2例)である。

検討内容は冠状動脈後遺症の程度と20歳までに経過観察と治療が出来なくなった症例では最終診察年齢、20歳過ぎても経過観察と治療が出来ている症例では現況である。

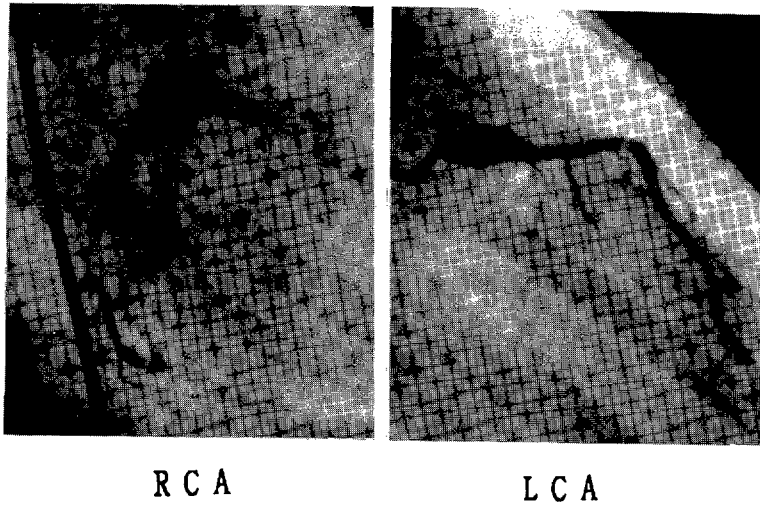
結果

1) 20歳過ぎても経過観察と治療が出来きていて、外科手術を必要としなかった症例について

20歳過ぎても経過観察と治療が出来きていて、外科手術を必要としなかった5症例の冠状動脈後遺症の程度と現況を表1に示した。最年長例は26歳の男性で、最年少例は20歳の男性であった(表1・図1)。

冠状動脈後遺症の程度は右冠状動脈閉塞例が3例もあり、決して軽症とはいえないが、全員日常生活では問題なく生活している。当然のこと抗血栓剤は服薬している。

2) 20歳過ぎても経過観察と治療が出来た外科手術症例について



20歳までに経過観察と治療が途絶えた8症例の冠状動脈後遺症の程度と最終診察見年齢を表3に示した

。最年長例は24歳の男性で、最年少例は21歳の男性であった(表3)。

冠状動脈後遺症の程度は右冠状動脈の小さな単独例(症例1)のような軽症例から左冠状動脈瘤+右冠状動脈80%狭窄例(症例6)や多発性冠状動脈瘤例(症例8)のような重症例までさまざまであった。

表2: 20歳過ぎても経過観察と治療が来た外科手術症例について

図1: 症例2の冠状動脈造影像

症例	年齢	生年月日	発病年齢	最終冠動脈造影所見	現職業	
1	男	20歳	48. 5. 30	2歳	右冠動脈閉塞	会社員
2	女	22歳	46. 7. 18	3歳	左冠動脈瘤・閉塞 右冠動脈再疎通	大学生
3	男	23歳	45. 1. 11	2歳	左冠動脈瘤(M)	大学生
4	女	24歳	44. 9. 22	3歳	心筋梗塞例(瘤ナ)	栄養士
5	男	26歳	42. 3. 28	4歳	左冠動脈瘤(M) 右冠動脈閉塞	運転手

症例	年齢	生年月日	発病年齢	手術年齢	最終冠動脈造影所見 右冠動脈・左冠動脈	バイパス 使用血管	バイパス 予後	
1	男	21歳	47. 4. 7	1歳	15歳	ANs LMT-95% LAD-95%	LITA-LAD	開存
2	女	22歳	46. 10. 13	8ヶ月	6歳	75% LMT-25%	SVG-RCA	閉塞
3	男	23歳	45. 4. 26	2ヶ月	7歳	ANm LAD=0	SVG-RCA	開存
4	男	25歳	43. 1. 13	5歳	9歳	0 LAD-90% CEX-90%	SVG-LAD	開存
5	男	26歳	42. 6. 9	5歳	6歳	0 ANL	SVG-RCA 変法	不明

表1: 20歳過ぎても経過観察と治療が出来きていて、外科手術を必要としなかった症例

20歳過ぎても経過観察と治療が出来た5外科手術症例の冠状動脈後遺症の程度と現況を表2に示した。最年長例は26歳の男性で、最年少例は21歳の男性であった(表2)。

外科手術の内容はA-Cバイパス手術例が4例、バインバーグの変法手術例が1例であった。さらに、A-Cバイパスに用いた血管は内胸動脈例が1例(症例1)で、大伏在静脈例が4例(症例2~5)であった。手術年齢は6~15歳であった。A-Cバイパスグラフの開存状況は開存例が3例(症例1・3・4)、閉塞例が1例(症例2)で、不明が1例(症例5)であった。

生活状況は全例元気で、日常生活には大きな障害はなかった。症例5は結婚し、子どもが2人いた。

3) 20歳までに経過観察と治療が途絶えた症例について

表3: 20歳までに経過観察と治療が途絶えた症例について

症例	年齢	生年月日	発病年齢	最終冠動脈造影所見	最終受診年齢	
1	男	21歳	47. 7. 30	4歳	右冠動脈瘤(S)	14歳
2	女	22歳	46. 3. 10	2歳	左冠動脈瘤(M)	16歳
3	男	22歳	46. 7. 23	7歳	左冠動脈瘤(M)	18歳
4	男	22歳	45. 12. 25	5歳	右冠動脈再疎通	20歳
5	男	24歳	44. 10. 4	2歳	左冠動脈瘤(M)	5歳
6	女	24歳	44. 5. 2	1歳	左冠動脈瘤(M) 右冠動脈狭窄(80%)	19歳
7	女	24歳	44. 5. 1	2歳	右冠動脈再疎通	16歳
8	男	24歳	43. 12. 6	4歳	多発動脈瘤	5歳

最終受診年齢は中学校までに経過観察と治療が途絶えた症例は8例中3例(症例1・5・8):37.5%で、高校生以上になって経過観察と治療が途絶えた症例は8例中5例(症例2・3・4・6・7):62.5%で、高校生以上になって経過観察と治療が途絶えた症例が多かった。高校生以上になって経過観察と治療が途絶えた症例が多かった背景には、小児科診療が中学生までという意識や思春期の心理的な問題などさまざまな背景が推測し得た。

考案

川崎病の長期予後については概略説明されているが、詳細については未解決な問題が多数ある。1例として、冠状動脈後遺症を残さなかった川崎病罹患児でも冠状動脈硬化症が若年で起こるのではないかという危惧がある。最近、直江らの炎症性冠状動脈硬化という概念を報告し、注目されている。一方、冠状動脈後遺症を残した川崎病罹患児の予後という図2に示したような概略が説明されている。しかし、冠状動脈後遺症を残した川崎病罹患児が成人になったどうなるかという報告は極僅かである。

今回の検討では、冠状動脈後遺症を残した川崎病罹患児が成人になっても比較的元気に生活していることが判明すると同時に、成人に達するまでに経過観察と治療が途絶えた症例が約半数もあった。経過観察と治療が途絶えた時期は思春期が多かった。結果、今後、小児科医は成人に達するまでに経過観察と治療が途絶えことの防止策は当然のこと、如何にスムーズに内科医に冠状動脈後遺症を残した川崎病罹患児をバトンタッチするかという問題も考えるべきと思われた。今回の検討でも重症冠状動脈後遺症を残した川崎病罹患児でも成人に達するまでに経過観察と治療が途絶えている症例があった。

少なくとも小児科医が10年以上の経過をみていて、時には両親と家族的付き合いにまで発展することがある症例を、本人の希望で内科にバトンタッチせざるを得ないこともある。内科に行った結果、今度は両親が満足しないといった事例もある。一口にスムーズな内科医へのバトンタッチといっても難しい問題もあるが、成人に達する川崎病罹患児も年々増加することより急ぎ、解決しなくてはならない問題である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:川崎病は川崎病博士が発見して以来,25 年余の年月が達ち,小児期に川崎病に罹患して成人に達した症例も増加している。今回,当院で経過観察している冠状動脈動脈造影にて川崎病冠状動脈後遺症の存在が確認された症例の内,年齢が20歳を越えて成人になった症例の冠状動脈後遺症,診察状況,日常生活状況を調査した。18例の成人例の内8例が,成人に達する前に経過観察と治療が途絶えてしまっていた。経過観察と治療が継続し得た症例は全員元気に過ごしていた。今後,川崎病冠状動脈後遺症例の内科へのバトンタッチなど検討する必要性が確認し得た。